「まるくおさめる」　最近日本人について書かれたエッセーが多く出ているが，それらに共通して見られる観察に，日本人は一見非常に不合理に見えるが，結局すべてを「まるくおさめてしまう」天才であるというものがある．

たしかに，われわれ土木技術者の社会をふり返ってみても，このような日本人の天才が発揮されることが多い．土木工事のように，予測のつきにくい要素の多い仕事を，頭初の約束で厳重に律せられては，とてもやってゆけないというのがわれわれの感じである．欧米式に立法や契約にすべての行動を規正することは，土木工事の場合などは非常に困難であり，いろいろな不都合も生ずるであろう．

しかし，未開人の脚力は発達し，文明国で乗物にばかり乗っている人間のそれは退化するように，契約を厳守しなければならないために生ずるトラブルで苦労してきた欧米人は，請負や契約に対して研究や工夫を続けて，請負制度を発達させてきた．一方，日本人（とくに土木技術者など）はほとんどこの問題を取り上げていなかったために，この面では欧米にまだ遅れている面が多いといってよかろう．

ＡＳＣＥ　たとえばＡＳＣＥ（アメリカ土木学会）の論文集に最近取り上げられたものを見ても，「建設工事における不慮の出費をだれが払うか（シンポジウム）」「建設工事契約における条件変更条項」「仕様書の書き方」「契約締結方法」「請負業者はいかにコスト見積りおよびコスト管理の組織をつくるか」「入札戦略と確率」「入札――仕事量のゲーム」「アンバランス入札モデル」「ＣＰＭ――完全な工事管理手段として」「建設産業における労働生産性」等，わが土木学会誌や，論文報告集でなじみのうすいものが多く取り上げられ，このような研究も土質力学や水理学と同じくらい土木技術者の関心を引いていることがうかがえる．

社会の変化　わが国の土木技術者は，明治以来，欧米先進国の技術を積極的に導入し，それを日本の特殊事情とよく適合させて，日本近代化に大いに貢献してきた．とくに最近の経済高度成長の蔭には，新幹線・高速道路・電源開発等を世界に類を見ないスピードで完成させていった土木技術者の力を忘れることはできない．

さて，土木構造物は，計画・設計・施工の過程を経て初めて実現される．この中で施工は非常に多くの人間・資材・機械を必要とするが，今日では大部分請負によってなされている．したがって，よりよい土木構造物をつくり上げるためには，計画者・設計者が意図したものをいかに忠実に実現するかの請負体制を整えることが，計画・設計・施工の技術と同じように重要のはずである．

ところが，わが国では，歴史的・社会的要因から，明治以来その請負の本質にはあまり大きな変化は認められない．他の製造業などとくらべると，契約などに対する考え方にも近代性を欠く面がある．しかし，そこは「まるくおさめる」器用さによって，あのように大きなプロジェクトもこなしてきてしまったのである．

しかし，工事量の急激な膨脹，人手不足，日本経済の国際化等の社会環境の変化は，土木工事を実施する上に見過せない影響を与えてきた．これらの変化に対し，従来の請負制度と「まるくおさめる」器用さだけで対処できるかどうかは，わが国の社会の進歩にも関係する重要な問題といっても過言ではない．

このために，建設業法が改正され，建設工事標準約款の改訂が進められるなどの行政的措置がとられている．また土木学会でも，建設業懇談会の活動が始まり，日本の土木技術者の関心も，じょじょに上にあげた問題に向っているといえよう．

今般，土木学会誌編集委員会はここに「請負制度を考える」特集号を企画し，各方面で土木工事請負制度に関する研究を積んでおられる方々にご参加いただいた．いろいろ複雑な問題もあり，書きにくいことも多かったと推察されるが，あくまでも個人的なご意見を大局的・建設的立場で書いていただきたいという編集委員会からのお願いを快く聞き入れて下さったことを深く感謝する．

もちろんこの特集号で何らかの方向が打出せるほど単純な問題ではなく，毛頭そのつもりもないが，日本の土木技術者が請負制度について考え直して見るきっかけになれば幸である．

土木学会誌編集委員会